

系統研究部門

江原昭善・野上裕生・相見 満・瀬戸口烈司

研究概要

1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究

江原昭善

(i) ヒトおよび各種サル類の下顎骨の機能的・形態学的研究

(ii) ヒトおよび各種サル類の頭蓋底部と姿勢の関連.

2) 東海地方出土人骨の研究

江原昭善・木下 実

3) 霊長類の歯の組織学的研究

野上裕生

4) ジャワにおける第四紀哺乳類の研究

相見 満

5) 第三紀霊長類・食虫類・有袋類の研究

瀬戸口烈司他

(i) 南米出土化石について

(ii) 南米大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

論文

- 1) 瀬戸口烈司 (1988): ヨザルがはらむ霊長類社会進化論への問題点. 季刊人類学. 19: 83-114.

総説・報告

- 1) 江原昭善 (1988): 「霊長類の適応」. 人類学講座第9巻. 雄山閣.
- 2) 江原昭善 (1988): 「人間はいかにして人間になったか」 I、II. 「悠」. 暁星出版.
- 3) 江原昭善 (1988): 「出土人骨の形態」伊川津遺跡. 渥美町教育委員会.
- 4) 江原昭善他 (1988): 「愛知県西尾市新御堂貝塚出土の中世焼骨および弥生時代人骨について」西尾市教育委員会.
- 5) 江原昭善他 (1988): 「愛知県刈谷市芋川遺跡出土人骨について」. 刈谷市教育委員会.
- 6) 江原昭善 (1988): 「アフリカ出土の化石人類について」. アフリカ事典. 平凡社.
- 7) 江原昭善 (1989): 「刈谷市出土人骨について」刈谷市教育委員会史誌.
- 8) 江原昭善 (1989): 「化石に基づく人類の起源と系統」霊長類の進化と人類の起源に関する

研究の推進. 昭和63年度科研費総合研究(B)代表: 野沢 謙.

- 9) 江原昭善 (1989): 「縄文時代に生きた人々」刈谷市教育委員会史誌.
- 10) 江原昭善他 (1989): 「新御堂貝塚出土の弥生時代人骨」第42回日本人類学会・民族学会連合大会.
- 11) 相見 満 (1988): オオガラゴかオオミミキツネザルか. モンキー 32: 21-23.
- 12) 相見 満 (1988): ニホンザルの遺存体. 伊川津遺跡 (渥美町教育委員会編).
- 13) 相見 満 (1988): 公文遺跡の出土骨. 公文遺 (I) (豊橋市教育委員会編).
- 14) 瀬戸口烈司 (1988): 化石の発見は、勘か、運か、偶然か? アニマ、193: 98-101.
- 15) 瀬戸口烈司 (1988): 謎を秘めたサル化石が見つかる—京都大学霊長類研究所の南米調査より—. アニマ、194: 68-69.

学会発表

- 1) 相見 満 (1988): ネオテニー: スマトラに分布するコノハザルの種分化をとく鍵. 霊長類研究、4: 192.
- 2) 高井正成・瀬戸口烈司 (1988): 南米コロンビアの中期中新世のサキ類化石. 第4回日本霊長類学会大会.
- 3) 瀬戸口烈司・高井正成 (1988): *Kanihystrix* (岐阜県可児市の中新世前期のヤマアラシ科新属)の系統的位置とその意義. 日本古生物学会第137回例会.
- 4) Setoguchi, T., and Shigehara, N. (1988): Fossil primates from the Middle Miocene of La Venta, Colombia. XIIth Congress of the International Primatological Society.
- 5) 瀬戸口烈司 (1988): 南米コロンビアの中期中新世の新発見の化石について. 第42回日本人類学会日本民族学会連合大会.

ニホンザル野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・東 滋・
渡辺邦夫・足沢貞成¹⁾

- 1) 教務補佐員

本施設の運営は上記3教官のほか、和田一雄・鈴木 晃によって進められた。昭和63年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以來の蓄積された資料をもとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度は、宮藤（日本モンキーセンター）による群れの統合度の研究などが行われたほか、渡辺邦夫・森 明雄（生活史）・河合雅雄（日本モンキーセンター）などの手で、これまでの30数年間に及ぶ長期観察データのまとめが精力的に行われた。内容はポピュレーション、順位、文化行動などで多岐にわたり、順次出版される予定である。また最近ほとんどの個体に広がった新しい行動である魚食いや、利き手の研究なども並行して行われた。今年も春から夏にかけて、島が堆積した砂によって地続きになり、サル番を出す日が多かった。普通秋に台風がきてこの状態は解消されるのであるが、年内に大きな台風は来なかったため、秋に入っても潮の低くなる夜間には歩いて島へ行ける状態が続いた。従って日中に潮の低くなってくる翌年2月の時点ですでに長時間地続きになっており、平成元年度にはサル番のために格段の努力が必要となろう。平成元年3月の時点での島内の個体数はマキグループ13頭を含め103頭であり、この10余年の間ほとんど変化していない。しかし1972年から1980年頃にかけて多かった初産年齢が大幅に遅れる個体はこのところみられず、どのメスも8才ぐらゐまでに初産をむかえるようになってきた。今年度の出産は9頭であり、うち2頭が死亡した。

2. 下北研究林

研究林発足当時（1973年）からしばらく3群（Z、M、I）だったこの地域の群れは、最近あいついで分裂している。I群も86年87年度の調査で同時に三グループが確認された。I群の生息域は環境破壊が進み、行動域は極度に拡大しており、分裂してできた三つの小群がそれぞれテリトリーを構える過程であろうと考えられた。そこで88年度の調査では、それを確認することに主目的をおいた。しかし、予想に反して群れは40頭をこす一群しか発見されず、前二年度の調査のさいはたまたまサブグループングしていたものと判断できる結果を得た。一方M群が二つに、Z群が二ないし三群に分裂したことは確実である。

また88年9月に恐山街道でサルの群れが地元民によって観察された。ここでは昭和20年代初頭を最後に全く情報が途絶えていた。89年3月に痕跡調査を行ったがこの群れが存在することは確実である。下北研究林はサルの生息域全域を含むことになっているが、サルの群れの数は増え（ただし個体数は微増にとどまる）、全体の生息域も拡大し、調査対象域は100数十平方キロ以上となった。わずか1名のスタッフでこの全体をカバーすることは不可能であり、ここまで持続発展されてきたこの研究林の機能を維持するために、なんらかの研究体制の改革が不可欠となってきている。

3. 上信越研究林

横湯川流域において、Seed Trap に入る果実量とその樹種毎の樹高・胸高直径分布から真の果実生産量を推定する作業を、10年間にわたって行っている。また志賀A2・C群及び雑魚川の群れの生態学的調査が続行された。1988年10月には雑魚川流域の現地で飯山営林署の担当者と森林施業に関する話し合いを行い、サルの生息環境維持に配慮するよう要請した。1987年6月に、長野市が1998年の冬季五輪日本候補地に決定され、岩菅山にアルペン競技のうち滑降コースが新設されることになった。これは大幅な森林伐採がこの地域で行われることを意味しており、ニホンザルの生息環境悪化をくい止めるための現状調査を強めることにした。また当研究林近辺の各地でも、猿害を理由に大量のサル捕獲が進行しつつある。それをくい止めるために特に山の内町役場と協議している。

4. 木曾研究林

この研究林が人里と接する地点では、近年有害鳥獣駆除としてのサル捕獲が続き、そのための対策をたてることが急務となっている。しかし、人手不足もあってなかなか有効な手だてが打ち出せない状態である。同様に研究林に接する木曾谷南部でも、いくつかの群れの捕獲がすでに進行している。より広域をカバーする地域個体群全体としての現状調査を行う必要があり、そのための方策が検討されている。

5. 屋久島研究林

鈴木 滋（京大理）と David Hill（京大理研修員）が Happa、Ark、半山M群で主としてオスの社会関係についての研究を進めた。夏及び秋に増井（竜谷大）と東他で研究林域のセンサスを

行った。夏及び冬季に増井、好広（竜谷大）、黒木（秦皇高校）らが瀬切川上流域の生態調査を行った。黒味川流域で大竹（JMC）、長井（産文研）が食性の季節変化を糞分析によって調べた。国割岳西斜面の国立公園第1種特別地域を貫通する西部林道（県道、栗生—永田線）の延長13kmのうち瀬切川から3kmの区間の拡幅改修計画の環境影響追跡調査（モニタリング調査）が鹿児島県自然愛護協会の手によって行われ、植生（一部）及びサルを分担した（山極、東）。資料委員会と協力して、猿害のための有害鳥獣駆除で捕獲され死亡したヤクザルの骨格の発掘（49体）と、冷凍標本（13体）の収集とを行った。これらの標本は資料委員会に移管される。

このほか研究林各地及びその周辺の状況を大幅に変えてしまいかねないような出来事も多く、関係各省庁に以下のような要望を行った。

- (1) 下北半島のニホンザル生息地での青森宮林局地域施設計画の策定にあたり、生息地の保全について研究所長名で要望書を提出した。また野辺地で飼われていたタイワンザルが多数逃亡し、この地域に出没し始めた問題に関して、霊長類学会、青森県、文化庁、環境庁に対し生態学的資料を提出し早急な対処方の要請を行った。
- (2) 屋久島では猿害対策としての有害鳥獣駆除のため、年間600頭にもものぼるサルが5年間も捕獲され続けている。その結果ヤクシマザルの総個体数は急激に減少し2000頭前後に落ち込んだものと推定される。屋久島研究グループは被害対策の見直しを含む総合的な対処を鹿児島県、環境庁及びIUCNに要請した。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・山口直嗣⁹⁾・冠地富士男⁹⁾

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析をすすめている。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成

2) 文部技官

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会現象をとらえ、survival conditionsを明らかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

3) 下北西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM、I、Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

4) スラウェシマカクの種分化及び社会生態に関する研究

渡辺邦夫

インドネシアのスラウェシ島において、島内に生息する7種マカクについて、外形特徴の種内変異、その成長に伴う変化、種間雑種の有無などについての調査を行った。またムーアモンキーの個体識別に基づく個体関係の分析を続けている。

論 文

- 1) Hazumi, T., Torii, H. and Azuma, S. (1988): The conservation status and ecology of Himalayan Black Bear in Japan. 18th Congress of International Union of Game Biologists (Torondheim, Norway).

報告・その他

- 1) Azuma, S. (1988): A report on the present conservation status of the Yakushima macaque (*Macaca fuscata yakui* KURODA). A proposal to Amend Appendix I or II of CITES.

学会発表

- 1) Hazumi, T., Torii, H. and Azuma, S. (1988): The conservation status and ecology of Himalayan Black Bear in Japan. 18th Congress of International Union of Game Biologists. Norway.
- 2) Azuma, S. and Masui, K. (1988): Spatial structure of the Yakushima macaque population. Symposium of Asian-Pacific Mammalogy.
- 3) 東 滋 (1988): 下北半島のニホンザル—国

有林の天熱林施業と関連して一、日本科学者会議シンポジウム。

- 4) Watanabe, K. and Brotoisworo, E, (1988) : Present situation of Sulawesi macaques. Symposium of Asian-Pacific Mammalogy.
- 5) 渡辺邦夫・山口直嗣・冠地富士男 (1988) : 宮崎県南部に生息するニホンザル集団について。第4回霊長類学会。

サル類保健飼育管理施設

松林清明(施設長・兼)・後藤俊二
鈴木樹理・松林伸子¹⁾

研究所で保有するサル類の総頭数は、出産や死亡により日々増減しているが、1年間で最も飼育頭数の大きくなるいわばピーク月は、春から初夏にかけてのマカクの出産期の直後にやってくる。

1988年度には6月末に920頭に上った。これは現在と同規模の施設予算に初めて達した1981年度のピーク月(7月:655頭)の40%増になる。近年は比較的穏やかな物価水準で推移してきたとはいえ、予算額すえ置きのままサル保有頭数だけが大幅に増加してきたわけで、これの影響は例えば治療・検査薬品費、飼料費の増大と、逆にケージ補修費、消耗品費、備品購入費の圧縮などに表われてきている。サルの飼育水準の維持・向上と施設自身の活動の為には、マイナスの傾向を強めていると言えよう。加えて1989年度からは消費税負担が始まり、飼育経費など固定的要素の多い施設運営予算には大きな打撃となる。一方予算交付額が急に増える見通しも立たず、止むなくサル保有頭数を数年がかりで100頭程度削減する計画を立て、サル委員会の議を経て、1988年12月の協議員会で了承された。この頭数削減が研究所全体の研究活動に支障をもたらすことは極力避けねばならないが、幸い所内繁殖も依然順調であり、性・年齢構成の見直し等によって出産数は大きく変わらない見込みである。サル頭数削減は研究所開設後初めての処置であり、実験用のサルが足りずに苦勞していた頃を思うと昔日の感があるが、適正なサイズに戻して投資効率を高め、動物飼育の質を維持するための止むを得ない方策である。

1) 教務職員

施設の活動としては海外出張が増え、松林施設長が7~8月に南米、11月に中国を訪問して学会発表や研究交流を行ったほか、鈴木助手が7~9月にタイへ調査に赴き、三輪技官が6~7月にマレーシアへ出張して技術指導を行った。人事では事務補佐員今井志江が3月に退職、後任に浜上希が採用された。

研究概要

1) サル類の繁殖に関する研究

松林清明

ニホンザルの繁殖成功度を左右する生理的要因のひとつとして、オスの連続射精時の精液性状の変化を調べた。また飼育下および野生群での二次性比および一才性比を調べ(常田英士氏との共同研究)、結果を公表した。

2) 実験動物としてのサル類の評価

松林清明

ニホンザルの高所適応能力を見るため、名大環境医学研究所と共同で低圧実験を行い、各生理値の変動を調べている。

3) 霊長類の寄生虫に関する研究

後藤俊二

(i) 野生ニホンザルを対象に、消化管内寄生虫相の地域差・生息環境との関連について調査、資料蓄積を進めている。

(ii) サル糞線虫の、その固有宿主における感染様式を明らかにするため、ニホンザルを用いた感染実験を行った。²⁾

4) サル類の成長の生理学および形態学的研究

鈴木樹理

各種サル類の成長を、血中各種ホルモン・酵素などの定量並びに生体計測によって解析した。また血中各種ホルモン・酵素の日内変動を明らかにするために、ベスト着用カニューレーション法による連続採血を行った。

5) サル類疾病の病理学的研究

鈴木樹理

本研究所および野外で死亡したサル類について主に、死亡率の高いと思われる出生直後から幼若齢までの死亡率を中心に、病理学的検索を行い、

- 2) 金子清俊・角坂照貴(愛知医大)、千種雄一(独協医大)、塩飽邦憲(島根医大)との共同研究。